「神のことば、聖書」

エペソ人への手紙６：１１－１７

October.11.2026

エペソ人への手紙６：１１－１７（パワポ）

Preface

先週に続けて、神の武具のうちの最後の武具・六つ目の武具である「御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい」ということについて考えて行きたいと思います。

私たちが持っていますこの聖書は、活字が印刷されている、所謂、本です。

ですが、イエス・キリストを神の子・救い主と信じるクリスチャンたちは、この聖書を単純な本、または印刷物だと思う人はいないと思います。

ヨハネの福音書１：１に、

ヨハネの福音書１：１－３（パワポ）

初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずできたものは一つもなかった。

とありますが、神というお方は、ことばだと言います。

ことばをもってご自身表しなさり、ことばをもってすべてのことを始めなさり、ことばをもって天地をお造りになられたお方、つまり、お語りになったことばに、神なるお方が何者なのかのすべてが込められていると、言います。

また、この神のことばが、肉体をもってこの地に来られたのがイエス・キリストであり、イエス・キリストこそ、神のことばの現れそのものであると、この３節以降続いて行きます。

そして、物事のすべてである神のことば、主イエスのことばが記録され、神ご自身がどういうお方なのかを啓示したのが、私たち人に示し伝えて下さったのが、聖書だということです。

だから、クリスチャンたちは、聖なる「聖」という字と、言葉が書き連ねられている書物の「書」を合わせて、「聖書」と呼びます。

聖書を単純な印刷物や本だとは言わず、聖なるお方が、人を通してお書き下さった書物、「聖書」と言います。

これをもって私たちは、二つの事実に気付かされます。

Part One

先ず一つ目は、神様がことばであられ、ことばをもってご自身を啓示して下さった本が聖書ならば、この聖書のことばを読まずして、この聖書のことばを

通してでなければ、神を知ることの出来る道理がないということです。

ちょっと失礼な問いかけかもしれませんが、皆さんがどれくらい長く信仰生活を送ったのかに関わらず、創世記１章からヨハネの黙示録２２章の最後まで、この聖書の内容を全神経を集中させて、ただの一度も精読・読み込んだことのない方がおられましたら、心の中で、今、手を挙げてみて下さい。

その方たちに、併せてもう少し失礼な質問をさせて下さい。
皆さんは今、何を信じていますか？
どなたを信じておられますか？
今信じておられる神とは、何によって知った神でしょうか？
神様がことばなのに、そのことばを見もせず、聞きもせず、どのようにして神様を信じるのでしょうか？

もしかしますと、信じているのは、「神とはこういうお方だ！」と、皆さんが皆さんの中で思い描いている「皆さんの考え、私の考え」を信じているのかもしれません。
または、皆さんの欲望を神様に投射して、皆さんの中で、私の中で作り上げた神の虚像を信じているのかもしれません。
もしくは、直接ではなく、つまり、聖書と直接向き合ってではなく、人から伝え聞いた言葉を基に自分の中で構築した、「神とは、イエスとはこういうお方なのだろう」という「だろう」を信じているのかもしれません。
そして、サタン悪魔は、しきりに、その「だろう」を信じさせようとします。
第二コリント１１：３で、

コリント人への手紙第二１１：３（パワポ）
蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔から離れてしまうのではないかと、私は心配しています。

と、パウロ先生が仰っている通りです。

男女が向かい合って、知人に紹介されて初めて会ったとします。
または、もう既にお付き合いをしていて、愛し合っている仲でもいいと思います。
目の前の男性がどんな男性なのか、目の前の女性がどんな女性なのかを知るためには、互いに対話を、会話を通して知れることが出来ます。
なぜか？
「言葉は存在の家」だからです。（ドイツ哲学者マルティン・ハイデガー）

その人がどういう言葉をもって、何を言うのかに従って、その人の人格や情

緒、品性や特徴が分かるようになります。
ですが、もし、その人の言葉を一度も経験せずに、顔がかっこよくて、顔がきれいで、家柄が良くて、お金をいっぱい持っているからと、結婚したとしても、その結婚が幸せである可能性はどれくらいでしょうか。
神のことばを見ずして神様を信じるというのは、それと同じようなことなのかもしれません。

私が本当に神様を信じるならば、イエス・キリストを私の救い主と受け入れたならば、この方の十字架の血潮が、私の罪に対する神のさばきを Pass Over、過ぎ越して下さるということを信じるならば、この方の御言葉で私の心をたましいを満たさなければならないのではないでしょうか。
なぜならば、神と人との関係は、夫と妻の関係だと聖書が教えて下さっているからです。

この方のことばが、私の心とたましいに満たされている時、私は忘れてしまっているけれども、その御言葉をいつ読みいつ聞いたのかを忘れてしまっているかもしれないけれども、そのことばが、生ける神の御言葉であるがために、最も重要な時に、聖霊なる神様が、私の心の倉庫にあるその御言葉を生かし、働かせ、導くようにして下さいます。
正に、御霊の剣、すなわち神のことばを取るということが起こるのです。

１年３６５日、１年５２週ですけれども、１年に５２回の日曜日に教会に来て、礼拝の時間１時間ですが、そのうち牧師の説教３０~４０分、それを聞いて、神様を知れる。
もしかしたら、滅相もないことかもしれません。
「説教３０分聞いて、神を知れる」
とんでもないことかもしれません。
唯一まことの神様を知ることが出来るように手助けすることは出来ると思いますが、その説教だけでは、神様を知ることは出来ないでしょう。

Part Two

二つ目の事実は、神様がことばであられるならば、そのことばを、みことばを理解しようとする努力が伴わなければならないということです。

例えば、我が家には中学生の男の子と大学生の男の子がいますが、中学生が、大学生のお兄ちゃんの書いた文章、論文などを読むとしたら、理解することが出来るでしょうか？
ある程度、少しは読むことは出来るかもしれません。
でも、大学生のお兄ちゃんが書いた一つ一つの言葉の意味、概念が合わさって出来た文章が何を意味しているのか、中学生に分かるでしょうか？
分からないと思います。

言葉は読めても、その深い意味については分からないでしょう。
それにもかかわらず、お兄ちゃんが書いた文章を必ず読んで理解しようとするならば、その中学生は、大学生のお兄ちゃんが書いた文章を読んで理解するための努力を、労力を投じる必要があります。

神によって造られた被造物である私たち人間と、私たちを創造された神様との違いは、中学生と大学生の違いとは比較にはならないでしょう。
「天が地よりも高いように、神様の考えは私たちの考えよりも高く、神の道は、私たちの道より高い」と、イザヤ書５５章に記録されていますが、天が地よりもどれだけ高いでしょうか？
限りがありません。
限りがないほどに、私たちの考えと神様の考えは、大きく違うと言います。

その神様のことばに、神様のことばを読んで、神様のことばを知ろうと理解しようとし、神様のことばに従おうとした時、その神様のことばをしっかり知りたいとするならば、私の心を注ぎ、私の時間を投ぜずして、神様を知ることが出来るでしょうか？
日本語で書かれている聖書ですから、目で読むことは出来るかもしれませんが、神様の御思いを知ること、私の心が神の心と合わさることが出来るでしょうか？

Part Three

最近、妻が、家で作業をしながら、「聴くドラマ聖書」で旧約聖書の預言書の部分を聞いていたのですが、ポロっと言った言葉が印象に残りました。
「どの預言書も、ずっと同じことを繰り返し言っているように感じるんだよね。神様は、「あなたの心が欲しい」とずっと言っているように聞こえるの。」
「ああ、確かにそうだな。そうかもしれない」と思いました。
「神様が欲しておられるのは、私たちの心だ」と。
神様は、ご自身の考えと、天と地ほどに違う私たちの心を欲しておられ、私たちの心が、神様の心となるように、イエス様の心となるように願っておられる。
そのために、神の心を知るために、聖書の御言葉を食す。

食すんです。
ただメニューを広げて、何を食べようかと考えているのではなく、注文した料理が出てきたにもかかわらず、その料理を目の前にしてずっとテレビを見ているようでもなく、手を使って、口に入れ、口に入れた瞬間の味わいと、しばらく噛んでいるうちに変わってくる味わいと、顎を使いながら、喉の筋肉を使ってしっかりと飲み込む。
飲み込んだならば、消化して、体を動かすエネルギーにする。
食事をする時に噛むという動作をしっかりするだけでも筋肉が付くぐらいに、

食べ物を食べるという行為は、静かな全身運動なんだそうです。
すべての労力と時間と財までも用いて、神のことばとしっかりと向き合う。
「人はパンだけで生きるのでなく、神の一つ一つのことばによって生きる」（マタイ 4:4）という食す行為が、私たちを真に生かすのです。

私自身初めて真剣に聖書と向き合い、聖書の御言葉を通して神様を知ろうと、知りたいと、知らなければと初めて思ったのは、神学校に入って３日目ぐらいのことでした。
恥ずかしながら、神学校に入学するまで、聖書を一度も全部読んだことがありませんでした。
読んだことがあるのは、マタイの福音書とヨハネの黙示録と、当時清野先生が講解説教しておられたローマ人への手紙の一部と、創世記と出エジプト記の途中まで、あと、青年会で分かち合ったいくつかの詩篇と箴言のことば、それが、神学校に入るまでに読んだことのある聖書のすべてだったと思います。
それでも私は、私自身のことを、誰よりも信仰に厚いと思っていましたし、「誰よりも熱く賛美を歌い、熱く祈る自信があり、神様のことについて良く知っているから、牧師になるための神学校へと導かれたのだ」と思っていた節がありました。
恥ずかしい限りですが、正に、自分の欲望を神様に投射して、自分の中で作り上げた神の虚像によって高ぶっていたようなところがあったように思います。
もちろん、今でもあるように思います。
それでも、神様があわれんで下さって、イエス様のことを伝えたいという思いを与えて下さった下さっているのは、感謝でしかありません。

そんな私が、私の信仰者としての実力を思い知らされたのが、神学校に入って始まったギリシャ語の特講が始まった３日目ぐらいの時の先生の質問でした。
「皆さんは、これまで何度聖書を通読しましたか？　５０回以上の方手を挙げてみて下さい。」
手を挙げる人がいるんです。
「４０回以上、３０回以上、２０回以上、１０回以上、５回以上。」
ここで、クラス８０名のうちのほとんどの学生が手を挙げ終えていました。
残りは、２，３名です。
「４回、３回、２回、１回。」
私は嘘をついて、最後の一人になってしまったので、２回だったか、１回の時に手を挙げました。
大きなうそをつきました。

その時、知りました。
「韓国の神学生すごいな、韓国のクリスチャン、すごいな」と思いました。
聖書の虫がごろごろしていました。
「そりゃ、クリスチャン人口２５％になるわ！」と直感的に思いました。

そこから、私の聖書を読む生活が始まりました。
読んでみると、なんとまあ、知っている風で、どれだけでかい口を叩いてきたことかを思い知らされたのと同時に、聖書の御言葉を食べなきゃやってられない、生きられない体質に変えられて行きました。

体の筋肉を保つのには、良質なたんぱく質を効率よく取ることが大事だと言いますが、本当の意味で人のからだ全体を保つのに大切なのは、神のことばだというのを身をもって実感できるように、神のあわれみを、その時から今の今まで受けてきました。

Part Four

聖書の御言葉は、神のことばです。
私たちが、神のことばをどれだけ愛し、どれだけ慕い、どれだけ求めることが、どれだけ神を愛し、どれだけイエス様を慕い、どれだけ聖霊様を求めているのかに、確かに比例しているんだと思います。

どんなに、「私は神を愛している。イエス様を慕っている。聖霊様の満たしを求めている」と言ったところで、もし、神のことばと距離があるならば、それは、家庭内別居、仮面夫婦、馴れ合い夫婦と同じようなことになっているのかもしれません。

私が最近、私の中で、しきりに思い出される御言葉があります。
ヨハネの福音書６：６３です。

ヨハネの福音書６：６３（パワポ）

「わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。」
イエス様のことばそのものが、聖霊なる神様であり、聖霊の満たしは、イエス様の、父なる神様の御言葉なくしては有り得ないということなんだと思います。
そして、「イエス様の、父なる神様の御言葉を真剣に向き合い、食すことが、いのちそのものだ」と、イエス様仰っているように思えて仕方がありません。

私は焚火が好きで、たまに焚火をするのですが、どう薪を組み、どう薪をくべていくのかが、焚火を気持ちよくする上で最も重要なことになってきます。
そんな焚火をしながら、思い浮かぶ御言葉がありました。
福音書の中で、バプテスマのヨハネが、イエス様のことを「私は水でバプテスマを授けていますが、この方は、聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けます」と言っている箇所がありますが、このヨハネの福音書６：６３の御言葉と合わさって、「あ、私の中に神のことばが薪のようにちゃんと組まれ、しっかりとくべられないと、どんなに聖霊の満たしを求めたところで、聖霊の火は

点かないし、例え、神のあわれみで点けられたとしても、聖霊の火は保たれないんだ」と思わされました。

だから、御霊の剣、すなわち神のことばを取ることが、私たちの信仰において最も重要なことなんだと思います。

Conclusion

最後に、土浦めぐみ教会の理念の第一項を読んで終わりたいと思います。

Ⅰ　聖書信仰に立ち（聖書信仰）　　Ⅱテモテ３：12－17　（パワポ）

教会は、『聖書は神のことばにして、信仰と実践の唯一最終の規範である』と告白する。教会は、この神の啓示に基づくもので、宣教、教育、奉仕の活動はもちろん、教会の運営も、聖書を通して語られる教会のかしらなる主イエスキリストのみ旨に従うことを告白する。

それ故、私たちは主日礼拝の説教をはじめ、あらゆる機会に、聖書全体から神の御声を聴くことを求める。また常に聖書を学び、絶えず祈りをして、日常生活に聖書の真理を生き生きと体験し、その証を自分の言葉で表現することに励む。

この、神のことばに聞き従い守り行う祝福が、私たちの日常生活の中にあり続けることをお祈りいたします。

お祈りしましょう。

祝祷：御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。